

SHISEIDO アルティミューン
「超えていこう。明日はもっと美しい。」ポスター（2020年）
撮影：セバスチャン・キム モデル：前田美波里



SHISEIDO
GINZA TOKYO



With One Another.
Without Limits.
Our Future Is Beautiful.

Powered by Ultimune Power Infusing Concentrate.

自信感、色：赤

自信感、色：赤

K: これはとてもオープンな描写だね。たった2つの言葉。自由に解釈する幅があるね。

A: 2016年ごろRemodelingのプロジェクトのために集めた描写はもっと一般的だったよね。例えば、「美しい女性、魅力的、セクシー」とか「女の子、官能的、黒と白、ナチュラルな髪、かわいい、若い、裸」とか。私は陳腐な表現だとおもったけど。

K: モデルが一般的にそのように見られるってことだね。「美しい女性、魅力的、セクシー」の意味はとても個人的なものだけど。「美しい女性、魅力的、セクシー」は、自信感になるかな？

A: うーん。まあ、自信になるよね。私にとっては、自信感は強くて独立していることかな。美術館では、半裸の女性のポーズの絵がたくさんあるよね。わざとらしいものもあれば表現が豊かで強いものもある。多くのヌード画に「美しい女性、魅力的、セクシー」という描写ができると思う。

K: うん、「裸」と「ヌード」の間には微妙な境界線があるね。「裸」が芸術として「ヌード」になる境界線。ヌードは常に「エリートのためのソフトポルノ」になる危険があるという記事を読んだことがある。

A: 表現の自由は尊重されるべきだと思うけど、同時に美術館にはポルノに近いイメージもたくさんあるよね。それは、女性を描いたり写真を撮ったりしていたアーティストや写真家がほとんどの場合男性だったからかもね。

K: モデルとして、女性は(注目される)視線の対象だね。写真の技術が生まれる前も後も。

A: 本当。観察/注視する行為は、ある種の力を表しているよね。観察者は視線の対象よりも優れているっていうか。ポートレートを撮るときは、モデルを支配しすぎないようにしている。カメラマンは、写真を撮るという状況を利用して、モデルに「ポーズをとる」ように簡単に頼むことができるけど、それをやり過ぎないようにしてる。私にとって写真を撮ることはコラボレーション。その過程の進行を一緒に楽しむ。ポートレートを撮るにはモデルが必要だし、モデルは私と同じくらい重要だね。

K: それは重要なバランスだね。

A: ちなみに、「見ると見られている」という状況を考えると、人は見られているからメイクをするのだと思う？

K: うん、そう思う。他人に自分自身をどのように見せたいかを示すよね。個人としてのアイデンティティと社会や他者との関係性におけるアイデンティティの両方に関係していると思う。子供の頃、妹と一緒に母の赤い口紅をつけて遊んだことがあったな。まるで大人になったような気がして。大人が化粧をしていることを学んで、それを試したいと思ったのよね。

A: 赤い口紅ね。描写にも赤が入っている。赤は大胆な色だね。目立ちたくないなら、赤い服や赤い口紅をつけないよね？

K: うん、赤い洋服と赤い口紅を使えるね。どっちがより自信感があると思う？赤い口紅を使って注目を集めるほう？それとも、十分自信があるから赤い口紅を使わないほうが自信感？

A: 両方かな？撮影の後で選ぼう。



SHISEIDO アルティミューン
「超えていこう。明日はもっと美しい。」ポスター（2020年）
撮影：セバスチャン・キム モデル：前田美波里



SHISEIDO
GINZA TOKYO



With One Another.
Without Limits.
Our Future Is Beautiful.
Empowered by Ultimune Power Infusing Concentrate.

赤、情熱、プライド、ポジティブ、前進、健康、強さ

赤、情熱、プライド、ポジティブ、前進、健康、強さ

K: この描写についてどう思う? なにかを思い出させる?

A: アムステルダム「の」[「プライド」]といたら「ゲイプライド」かな。どう思う?

K: うん、「ゲイプライド」は一般的な単語になったね。「ゲイプライド」、「トランセクシャルプライド」、「女性のプライド」。自分の権利が平等でないと感じる状況にある人々は、「プライド」をつける。日本語でプライドというと「プライドが高い」「プライドが傷つく」とか、ネガティブな意味合いをもつこともあるけど、本来の「プライド」は「誇りに思うこと」であり、自分を尊ぶということだよ。ゲイプライドの旗はレインボーカラーだね。それも個性の尊重、多様性の象徴じゃないかな。他の言葉はどう? 情熱とか、前進とか。

A: 情熱は、モデルのエネルギーにあるかな。ボディランゲージと目の表情から感じたりする。だから、ボディランゲージを考えるといいね。それでどうやって情熱を表現できるか。

K: モデルがカメラを真っ直ぐ見つめる。

A: でも、堂々と立って目をそらしている人を捉えても、情熱的に見えるかもね。

K: 本当だね。あと、ポーズは? ポーズで情熱や強さを示そうとすると、どのように見えるだろう。

A: 足を広げて椅子に座っている人は、ある意味強さを表現していると思う。あと、腕を開くことは情熱かな。地に足がつくのも強さかな? 反対に、髪や手で顔を隠すことで、情熱も強さも減るかな。

K: 前進は?

A: 写真は、ある動きが凍った瞬間でもよいかも。過程が切り取られた瞬間。健康と組み合わせ、スポーツの状況にしてもいいね。

K: そうだね。モデルはだれにお願いしようか。

A: マリコかサローメは?

K: よいね。ふたりとも、強いと同時に落ち着いて自信がある印象を与えるよね。どちらも黒髪。サローメはダーク

スキンで、髪がカール。マリコは西洋的な特徴があり、彼女の髪はまっすぐだね。

A: え? 面白い。ドイツ人の私にとっては、マリコはアーモンド型の目と黒いストレートヘアでアジア人に見えるよ。彼女の頬骨もアジア人の特徴かな。日本人にとっては、彼女は西洋の特徴をもっているように見えるのね。面白い。

K: 自分たちの社会的・文化的背景を照らしあわせるよね。良くも悪くも、それは私たちの人の見方に影響を与えるね。



右半分

その写真との再会は偶然だった。久しぶりに実家を訪ね、ほとんど物置と化した自室の勉強机を整理しようと抽出しを引き抜き、何かはらりと落ちた気配に視線を落とすと、思いもしない顔が床からこちらを見上げていた。三十年以上前に会った、思い出すこともほとんどなくなった顔だった。

名前はそう、シンシア、略してシンディーだ。彼女に惹かれたのはまず声だった。腹に響くほど厚みのある、深海に降りていくように神秘的な声だった。そして、親しくなっただけからはあの肌に吸い付くような吸引力。からだ全体に見えない吸盤が付いているように皮膚のエネルギーが強く、彼女と抱き合っていると自分が別の生き物になっていくような高揚を覚えた。

日本の企業がニューヨークのロックフェラーセンターを買収したとか、ゴッホの「ひまわり」を落札したとか、派手な話題がマスコミを賑わせていたバブルの絶頂期だった。シンディーは昼間は英会話学校で教え、夜は外国人のたまり場になっているカラオケパブで働いていた。当時の東京は、英語圏の外国人にとって短期間に荒稼ぎができる場所だったのである。

ビザが切れて帰国が迫ってくると、彼女についてロンドンに行くことを考えた。大学の最終学年だったが、卒業してすぐに就職するなんてつまらない、まずは日本の外を見てみるのだ、と息巻いていた。そんな青臭い発想ができたのも日本の経済力のせいだったと、いまになって悟るのだが。

一緒について行くというアイデアを、シンディーは喜んでくれるはずだ。少しも疑わずにそう思い込み、勇んで口にする、彼女の態度がにわかには転じた。冷ややかになり、「忙しい」というセリフが増え、ある日いきなり目の前から消えてしまったのである。

当時は何がなんだかわからず、吸着板からふいに落下するあのプラスチック製の吸盤になったように、呆然自失の態に陥った。気に障るようなことをしたのだろうかと考えたが、何ひとつ思いつくことはなく、巷に掃いて捨てるほど転がっているつかの間の関係だったと認めるまでにしばらくかかるほど、大きなショックを受けた。

この写真はモデルクラブのプロモーション用に撮ったもので、たくさんプリントしたからあげると言ってくれた一枚だったと思う。右の眉が上がっている。そう、彼女はよくこういう表情をした。右肩を斜め前に突き出して、肩の先でこちらの顎をしゃくり上げるようにして見つめる。アナタはもっとやれる、力を出し惜しみしちゃだめよ。度々そう言われた。惜しんでいるつもりはなく、ただどのように出していかわからないだけだったが、いままさに錨を揚げて人生に出航するような堂々とした態度でそう言われると、暗示にかけられたように自分のなかに潜んでいる

ものがむっくりと起き上がるのを感じた。狂いのない矢のようなその挑発を受けて立つ能力は当時の自分になかったとしても、スリルだけはかき立てられたのである。

写真を見ているうちに、どこかにひっかかりを感じた。垂直にしたり斜めにしたりしたあげくに、掌を顔の真ん中に置いて右半分を隠してみた。掌を起こして何度もおなじことを繰り返すうちに、その正体が見えてきた。顔の印象が右と左で異なっていた。右側に現れている人物とは別の人間が、左半分に潜んでいた。

一緒だった頃に、同じことを感じた瞬間があったのを思い出した。彼女の仕事が終わるのを待って会い、軽く食事をしてバーに寄ったが、なにかの理由で彼女の左側に自分が座ることになった。当時は電車のシートに座るときも、バーのカウンターに並ぶときも、カウチに座ってビデオを見るときも、ベッドに横になるときも、彼女の右側に来るのが常だった。生まれつき右耳の聴力が弱いため、相手がだれであれ、よく聞こえるほうの左耳を向ける習慣が身につけていたのである。逆の位置に座ってみると、彼女の横顔がいつもとちがって見えた。こんな顔だったのだろうか、どこかで知らない女性と入れ替わってしまったのではないか、と一瞬そんな不安が兆したことに自分で驚いた。顔には疲れた表情が浮かび、言葉も少なく、スコッチを二三度口にするすると黙り込み、とりつく島がなくて一杯だけで店を出たのだったが、そのときの奇妙な感覚が、写真の左半分の顔を凝視しているうちにまざまざとよみがえってきたのである。

あの頃、まったく意識しなかったシンディーのもうひとつの本質が、その左側の顔に隠れているような気がした。たしかに彼女は気さくで、人好きのする、陽気な人物だったが、底抜けのお人よしというのとはちがった。深みのある声と同質の成熟した眼が備わっていて、判断するときは容赦がなかった。理性のまさら冷徹とも言える表情が、左半分の顔をぜんたいに広げたなかに浮かび上がってきた。あの頃の自分は浮かれ気味で、退屈なほど無邪気で、当時の日本そのものだった。スイートだけど歯ごたえのない、ディナーのあとに出てくるアイスクリームの器にちょこんとった、あのウエハースのような薄っぺらな添え物に、彼女が飽きたのも思えば当然のことだった。右半分だけを見て崇拝していたのだ、と三十年前の写真が耳打ちしてくる。写真はまったく変わらず、自分のほうが変わったのだった。